

想 創 奏

平成 28 年 7 月 15 日
発行者 荒川輝男
編集 吉信勝之
〒536-0013
大阪市城東区鳴野東 3-18-5
社会福祉法人 そうそうの杜

TEL 06-6965-7171
FAX 06-6167-2622
Mail a_un@sou-sou.com
HP <http://www.sou-sou.com>



[震災前の熊本城]

今回の表紙は、震災前の熊本城です。なんと美しいお城でしょう。写真の一番手前に立っている櫓が宇土櫓で、400年前に加藤清正が築城した櫓です。震災後の熊本城は報道などで痛ましい姿になっています。今までに幾度も崩壊の危機を乗り越えてきた熊本城は絶対に復活します。そのためにも日本国民の財産である熊本城そして震災に遭われた人たちを支援していきましょう。そうそうの杜は、息の長い支援をしていきたいと思っています。

社会福祉法人 そうそうの杜

目次

巻頭言

「偶然にも」

理事長 荒川 輝男 . . . 3

1. 熊本地震 被災地派遣（第一陣） 報告 . . . 4～5

真頼 正施 . . . 6

山川 真司 . . . 8

徳岡 信 . . . 10

福 寛 . . . 11

籾田 花恵 . . . 14

井上 愛子 . . . 17

大竹 寛輝 . . . 18

…法人としては4月28日～5月4日までボランティアとして第一陣8名が熊本に支援活動で入りました。その後、法人内で熊本へのボランティアを募ったところ、20名の職員が手を挙げました。また各事業所では実際に地震発生した時の状況を確認してもらいました。

2. 被災地支援活動日誌 . . . 20

3. 各事業所より . . . 27～31

「今地震が発生したら」

4. 権利侵害・虐待についての聞き取り . . . 32～33

権利侵害・虐待についての聞き取りは、10年ほど前から利用者に対する権利侵害・虐待自己チェックリストを元に支援現場での虐待や権利侵害が起こらないように年間6回（奇数月の月末に提出）取り組んできました。しかし平成25年、26年度と大きな虐待事件が発生し、取り組み自体を変える必要性から、今年度から方式を変えることとし、詳細は改めて報告しますが今回はとりあえず簡単な報告と致しました。

5. 賛助会 . . . 34

巻頭言

——偶然にも——

理事長 荒川 輝男

思い起こせば、5年前の2011年4月28日夜に宮城県仙台市へ向け4人で車に乗り出発した。とにかく少しでも早く行かなければならないと思いながらも、仙台に行くのが不安で想像もつかないような無残な光景が待ち受けているのだろうと思いながら足がすくむ思いで車を走らせた。

この5年間、宮城県の南三陸町で支援し続けてきたが、当初の支援日数からすればここ2年間は実質的な支援というよりも震災後に立ち上げた特定非営利活動法人「奏海の杜」の側面的な支援に変化してきている。

そして5年後、偶然にも同じ月日、4月28日夜、大阪南港からサンフラワー号に乗り別府経由で熊本を目指した。

遠くになりなけりと思っていた私のふるさと、熊本は、18歳まで育ったところでもある。ちなみに実家は熊本県の南部なので特に被害はなかった。

行く前、熊本学園大学の教授とやり取りしていたのと、いち早く「ゆめ風基金」が動いていたので、震災直後の情報を入手した上で、今回もスタッフからの要望で支援に行くべきだという声が上がってきたため法人としての取り組みを検討し、先発隊としていくことにした。

私もスタッフも、5年前のあの茫然自失となった東日本の地震、津波の爪跡を見て支援してきたので、熊本入りした当初は被害が局地的であったために肩透かしを食っ

たような印象だった。

しかし、被害が甚大であった益城町の被災の様子を目の当たりにすると、阪神大震災を彷彿させるような光景に言葉を失うほどでもあった。

改めて、自然災害の威力を目の当たりにしたときに、人間の微力さを感じる思いであった。

だからこそ、近畿地方でも言われている南海トラフ地震がいつ起こってもおかしくないという状況の中で対策を講じていかなければならないということしっかりと頭に叩き込んで帰ってきたのが今回の結果であった。

法人として東日本大震災の支援は、花を持って行くのではなく種を蒔きに行くんだという前提で支援し続けてきた。今回も、同じ視点、目的で継続的な支援を念頭に入れて取り組んでいく。

既に、第1次派遣として5月23日から1週間交代で希望するスタッフを派遣開始している。とりあえず8月くらいを目途に継続していきたい。



(結果)

法人として7/2(土)を以って支援を一旦終了しました

1. 熊本地震 被災地派遣 報告

1. 視察

①メンバー

- ・4/28～5/4 荒川輝男 真頼正施
- ・4/28～5/1 山川真司 徳岡信 福寛 粂田花恵
- ・4/29～5/2 井上愛子 大竹寛輝

②関係機関

- ・熊本学園大学（花田教授、村上市議）
- ・被災地障害者センターくまもと（東弁護士）
- ・生活介護支援センターあゆみ（生活介護業務、夜間利用者の宿泊対応）

③その他（益城町、大津町、西原村の被害状況視察）

2. 「被災地障害者センターくまもと・JDF 熊本支援センター」開設

①ボランティア募集と要件

- 障害者福祉に1年以上の経験があること
- 1週間以上の滞在が可能であること

②宿舎

- 一戸建て住宅
- 男女別室（男性：雑魚寝、女性：段ボールベッド）
- マット、毛布あり（布団無し）※寝袋持参ください
- ガス、水道、電気OK（自炊、入浴可）
※近所にスーパーあり

③ボランティア募集のお知らせ・参加申し込み書（別紙）

3. そうそうの杜被災地派遣

①派遣予定（別紙）

- 希望者19名（視察メンバー8名を含む）
- 5/23より実施（1人7日間）し1人目が5/29に帰阪予定
- 視察メンバー以外を優先的に派遣する
- JIC保険加入（死亡・後遺障害5千万円、入院日額3千円、通院日額2千円等）

②活動内容

- 住居内片づけ、ゴミ出し、引っ越し等荷物整理
- 避難所への広報（ビラ配り）、調査は手付かず
- ケース対応（傾聴、介助、役所手続き同行）
- 物資の運搬

③活動報告より

- 相談件数は約 100 件（片づけが多い）
- 積極的に関わろうとし過ぎると相手は引いていくので注意
- 制度利用未経験の人が多く、関わってみると家族全体で支援が必要だった
- 片付けをきっかけに制度説明、新たなニーズにつながることが多い
- 益城町に関しては、各避難所にビラは配布しているとのとのことだが、福祉避難所も 2 ヶ所あるにもかかわらず、外部の者は入れない状態で情報もない状態である
- 当事者の方と話を聞く場面では、不安や不満など色々な思いが錯綜しており、聞いてくれるだけで気持ちが楽になるという方も中にはおられた



今回は局地的なこともあり、道路を挟んで被災された人・されてない人の中で同じ境遇の人でコミュニティが出来てしまい分断してしまってる事も話を聞き、目だけでは見えない状況も感じた。

女性ボランティアの絶対数が不足しているにもかかわらず、女性からの要請が多い

- ・女性ケースへの対応には必ず女性ボランティアが同行するようにしている

※熊本学園大学の避難所は 5/28 に閉鎖（全員帰宅したため）



報告—1

真頼正施

4/28 大阪から別府行きフェリーで出発（6名、車両2台）。

4/29 別府着。熊本市に向けて移動（大分自動車道湯布院 IC—鳥栖 JCT—九州自動車道熊本 IC）。大分自動車道別府—湯布院間は通行止め。湯布院に向かう迂回路では土砂崩れこそなかったものの路肩が弱って進入禁止のコーンが置かれていた所もあった。また、屋根にブルーシートが掛けられている家屋が見られ屋根の破損や雨漏りが想像できた。高速道路では様々な地域の水道局の給水車や重機を載せた車両が見られた。から見える風景の中でも熊本市に近づくにつれブルーシートのかけられている家屋が増えていった。

九州自動車道を熊本 IC で降りる。車内から見える熊本市内の風景は日常生活を取り戻しているようであった。ガソリンスタンド、飲食店、コンビニ等は通常通り営業しており、町の中を行きかう人たちにも笑顔が見られた。東日本大震災の被害を受けた南三陸町のような呆然としてしまわざるを得ない風景ではなかった。

熊本学園大学の花田昌宜教授を訪ねる。見学をさせてもらいながら「障害のある人が自宅に帰りつつありニーズが少なくなっている、学生ボランティアが充足している」との説明を受ける。また、「被災地障害者センターくまもと」事務局の東俊裕弁護士を紹介してもらい訪ねる。熊本学園大学の教授でもある東弁護士からは、前震、本震以降の障害のある人の生活の状況や熊本学園大学の講堂がインクルーシブな避難所になった経緯を聞かせてもらった。

「被災地障害者センターくまもと」からの要請で熊本市西区中原町の生活介護事業所「あゆみ」へ移動。対象となるのは脳性麻痺等の身体障害のある方であり、親の会によって設立され運営されている。利用者・スタッフで親子関係というケースが複数あるとの事。現状としては、被災した利用者が避難所の環境に適応しにくい為、日中だけでなく夜間・宿泊の利用者（男性2名、女性1名）の対応も事業所で行っているとの事であった。また、事業所スタッフも被災しており疲労感が目立つため日中20名程度の利用者対応（入浴介助、食事介助）も手伝う事となった。

「あゆみ」宿泊、夜間利用者対応。

4/30 日中は衣類の着脱、機械浴の入浴介助を7名。スタッフ3~4名で大きな浴室と脱衣場を行き来し流れ作業の様で脱衣、移乗、洗髪、洗顔、洗体、機械浴、移乗、着衣とこなしていく。男性ボランティアがいても同性介助は間に合っていない。一人当たり衣類着脱含めて15分かけていないように感じた。

日中活動の目玉としては心理リハビリテーション（動作法）の実践という事であり、インストラクターがストレッチのような感じで利用者の体を動かしている。体に触れる事で安心感を与え信頼関係を作るきっかけとしている。やっていることはリハビリテーションと変わらない。しかし、対象者との良好な関係性が絶対的条件であり、非常に重視していた。

「あゆみ」宿泊、夜間利用者対応。

5/1 益城町視察。GW前半の連休最終日であり日曜日ということも重なって、熊本市内から益城町に向かうルートは渋滞。時間

がかかるが道路から見える家屋の壊れ方が徐々にひどくなっていくのが分かる。電柱やポスト、道路標識がまっすぐに立っていない。熊本市内の平常な生活環境とは全く異なる世界が広がっていた。まさに被災地であった。東日本大震災の津波による被害とは異なり何もかもが無くなっている状態ではないので何とも言い難い。つい最近まで生活していた環境が破壊されているもののパーツとして残っており再生が難しい。思い出や生活の跡が形を変えて残っている。持ち主にとっては辛い事であると感じた。

午後は、熊本学園大にて活動。避難している人も日中は少なく自宅の片づけ等で外出している。生後3か月の赤ちゃんがいたのでタライで入浴。着替えを済ませてミルクを飲んでもらう。赤ちゃんの存在は自然に周囲の人の笑顔を引き出していた。

「あゆみ」宿泊、夜間利用者対応。

5/2 「あゆみ」日中対応。夕方、ボランティア会議。そうそうの杜メンバーが帰阪し新たにボランティアが入る。自己紹介、今後の方向性を打ち合わせ。夜間対応の必要性が無くなるのは5/7、最長でも5/10までとの事。そうそうの杜は最終的に5/3で引き上げるので5/3以降はチーム石巻が継続的に入るとの調整が出来た。

「あゆみ」宿泊、夜間利用者対応、夜間対応引継ぎ。

5/3 日中の「あゆみ」の支援をチーム石巻に引継ぎ。

熊本学園大にて村上市議、稲田さん他と情報交換。避難している人の話を聞きながら炊き出しの昼食を頂く。風雨が強い中、阿蘇方面に向けて車移動。大津町付近で阿蘇

行きをあきらめ西原村視察に向かう。西原村は人口も少なく山間部であることと悪天候のため歩く人もなく非常に寂しい印象。実際、メディアへの露出も少なくボランティアの数自体少ないとの事。家屋、道路の被害状況は益城町と同様に局所的にひどい。ブルーシートを掛けることをあきらめている家屋が多数ある。

九州自動車道熊本IC-新門司IC移動。新門司港から大阪行きフェリーに乗船。(2名、1台)

5/4 大阪着。

【感想】

熊本地震における被害の多くは、住居に関する事であり最も重要と思われることは生活の場の再建と確保であると思われる。被災者の避難所での生活状況は東日本大震災のそれとはほとんど変わらないだろう。しかし、熊本市内がほぼ日常の生活を取り戻しているため、避難所や被災した自宅から職場に出勤し通常の業務をこなさなければならない。津波の被害で何もかも失い、ゼロになった東日本大震災の被害とはこの点で異なると感じた。風景だけで言えば、津波被害で住居のコンクリート基礎だけが残る野原の風景とは異なるが、危険という理由で住居の中に入れず、何をすればいいのか茫然自失・・・という点では被災された方の感情としては同じであろう。被災された方においてはその人それぞれに様々な事情があり、外から入ってくるボランティアが出しゃばらず、おせっかいにならない様、傾聴しながら出来ることを模索していく必要があると感じた。

報告—2

山川真司

まずは、連絡が取れていた熊本学園大学訪問する。一時は多くの方が避難されていたとの事だが、今はこちらでは人は足りているとの事。次に、くまもと被災地障害者センターへ訪問するが、何から手を着けたらよいのか分からないような状況で、色々なことを言われるが、結局確実に人がいるという話がある生活介護事業所あゆみを紹介され行く。(定員 20 名の事業所。)

4 人(男性 2 人女性 2 人)がサービス外で泊まっている。避難所としての機能よりはレスパイト的な状況で夜間支援を行っており、従来のスタッフも家族で格子柄されているような状態で、泊まり対応できないことから、夜間の対応者を望まれている。その中でも通常の支援としては、男女一名入れ歯対応できるだろうとみられるが、やはり経験された自身の話を聞いているとわかるが、いざと言う時にマンツーマンでないと逃げれないという事が頭から離れないと話してくださる。

具体的な支援内容は宿直のような支援と日中の手伝いと合わせてスタッフの宿泊も提供していただく。夜間支援は脳性マヒの男性の寝返りと排せつ介助が主になり、徳岡が主にかかわる。

4/30 日中支援のボランティアとして 3 人を残し、益城町視察に行き、再度学園大での活動が必要との情報で動く。熊本市街は所々で爪跡が見られるが、それほど大きなものは見られないと感じる。だが益城町に近づくにつれて家屋の倒壊がみられ、被害の大きさが見られていくが、主要な道路ではほとんどで倒壊での交通が出来ないこと

や道が割れているなどもなく、多田渋滞はあるが、交通ができる状態であり、古くからの住宅が多かったという原因もある様子。

その後、熊本学園大学にて、保健師に会いどうするかという所で、避難所の中を案内され、そのままヒューマンネットワークの方で市議(車椅子)の話を伺うが被災者の方もほとんどおられず、熊本被災地障害者センターへ昨夜の会議がどうなったのかを聞きに伺う。そこで八幡氏に出会う事ができ、今後の障害者支援については全国相談支援専門員協会が中心となり調査、支援策を取っていく模様。被災地障害者センターはそこから漏れる方の支援が中心になるだろうとのこと。今後の対応について話し合いの場となり、そこでの被災地派遣がそうそうの杜としても必要だという話ができる。

5/1 徳岡とあゆみの日中支援のボランティアとして残る。車いすの方で重度の方も多く、広いと感じていたフロアも狭く感じるほどだった。午前中のうちに男性 9 名女性 5 名の入浴対応。脱衣～洗体～機械浴～着衣と流れ作業、広い脱衣室ではあったが、車いすの方や、起き上がりのできない方が連続すると上手く動かないと手間取り体感的にも寒くなったり暑くなったりしてしまうと感じる。食事介助時に、急に食欲がなくなり食べなくなった利用者の方がおり、熱を測ると 8.2 度あり、その方と別室で過ごすことになる。事業所プログラムがほとんど終わり、送迎に出られていくところで帰阪する。

【感想】 もちろん東北とは津波もなかったもので、大きな違いは理解しましたが、最初に熊本市内でも大きな被害があると考え

ていたので、市内を通行している時には、あまりにも、普通に町が動いていることに逆に何しに来てしまったのか？と考えてしまうほどでしたが、熊本学園大の避難所に行き、当時の話を聞き、益城町を見ると、被害の大きさを確認でき、阪神の時を思い出しました。が何かが違っていました、それは身近で無かったからかもしれませんが、道路が普通に走れたことでした。だからこそ車の中から見ている風景は、テレビなどで見ている風景と大きな差で無かったのかもしれないと今は考えてしまいます。ただ、場所や地震の規模・起き方によってこれほどの差があるのか！という事に驚き、これから先に起こるであろう、大阪や近畿での地震をどうやって乗り越えていくべきなのかを考えると、何を備えるべきなのか？を本当に考えました。

勿論物資の事も大事ですが、情報をどうやってしっかりと拾い、退所して行く事が出来るのかが大きな備えになると今は考えます。



倒壊した木山神宮



報告-3

徳岡 信

4/29 別府～湯布院～熊本

熊本学園大学・・・一時最大 60 名くらいの方が避難してきていたが現在は 10 名程度。在宅支援体制が整ってきた方から帰宅されているとのこと。

くまもと被災地障害者センター・・・立ち上がったばかりでまだ何から手を着けたらよいのか分からないような状況、そこで生活介護事業所あゆみを紹介される。

生活介護事業所あゆみ・・・20 名の事業所。4 人（男 2・女 2）がサービス外宿泊。避難所としての機能よりはレスパイト的な状況で夜間支援を行っている。

具体的な支援内容は夕方から朝の宿直のような支援と日中の手伝い。合わせてスタッフの宿泊も提供していただく。

夜間支援は脳性マヒの男性の夜間寝返りと排せつ介助。

4/30 益城町視察

益城町は昔からの熊本市のベッドタウンで、古くからの民家が多く耐震対策以前の住宅が、今回倒壊等の大きな被害になっているようである。

再度熊本学園大訪問、保健師とヒューマンネットワークの方(車いす)の話を伺う。

熊本被災地障害者センター再度訪問、八幡さんに出会う事ができる。

今後の障害者支援については相談支援専門員協議会？が中心となり調査、支援策を取っていく模様。被災地障害者センターはそこから漏れる方の支援が中心になるだろうとのこと。今後の対応について話し合いの場となる。

あゆみに戻り夜間支援実施。

5/1 山川・徳岡であゆみの日中支援。あゆみは車いす利用者が多く、フロアは広いものの手狭に感じた。午前中のうちに男性 10 名女性 4 名の入浴対応。脱衣～洗体～機械浴～着衣と流れ作業、広い脱衣室も車いす利用者 2 名入るとごちゃごちゃになる。その後 CP の方の食事介助、午後はリハビリ場面の見学とレクリエーション、事業所プログラムがほとんど終わったところで帰阪の途に着く。

【感想】

阪神、南三陸と震災直後の被災地の状況を知っているだけに、訪問初日の熊本はあまりにも日常すぎて逆に戸惑いました。しかし熊本学園大の避難所を訪れると実際に避難されている方のご苦労に対して少し理解できたように思います。更に甚大な被害のあった益城町を訪れると、被害の大きさに驚き、阪神の時を思い出しました。自宅の片づけをされている人の姿を見ると何かお手伝いをしたい気持ちにかられました。ただ、自宅や商店を片づける人たちが家の中からいろいろなものを取りだす姿を見て、思い出の品々が焼けてしまった阪神や何もかも流された南三陸との違いも感じました。余震について夜間に震度 3 程度の地震に何度も遭遇すると、特に障害者の方の不安は強いのだらうとも思いました。いろいろな方の話しを聞いていると、今回の熊本の被災地支援は、南三陸の時とはまた違う形になると思います。今後どのような支援が本当に必要なかを考えるきっかけになった被災地訪問でした。

報告-4

福 寛

4. 29日（金） 『被災地障害者センター 熊本』 東先生の元へ。地震発生当時の状況から、熊本学園大学の避難所立ち上げ経緯などを東先生より聞かせていただいた。震災発生から私たちが赴くまでの約2週間、被災された人々は大きな災害に見舞われたことを受け止める余裕も無く、目の前の状況を何とかするというで精一杯であった様子が伺え、ようやく被災地障害者センターを立ち上げ形だけを作ることができたという印象を受ける。『今すぐ人手が必要』という感じではなかったので、午後からは被害の大きかった熊本市東部へ足を運ぶことに。

熊本市内ではところどころ屋根瓦にブルーシートが被っているという状況であったが、20~30Km離れた東部に向かうに連れ、ブルーシートの数も増えていき、全半壊の建物も多く見られるように。大津町へ到着すると、周りを田んぼと山に囲まれた集落があり、建物も古いものが大半であった為、被害を受けていない建物を探す方が難しく、道路は所々地割れしており通行止めの看板を避けて地元の人が車を走らせているというような、熊本市内と全く違った光景が広がっていた。しばらく被害状況を見るべく歩いて移動していると、地元の年配の男性に「どこから？」と声を掛けられる。「大阪から…」と説明をすると、地震発生当時のことから、今現在の暮らしの状況までを話して下さる。その男性の家は半壊しているの、夜間は車中泊をしているらしく、昼間は自宅の片付けと食料の配給を貰いに避難所に通う生活が続いてい

るとのこと。地震の影響か、「車も故障したまま」と男性は話す。

その後、日も傾いてきてはいたが、大津町の避難所の1つとなっている総合運動公園（体育館併設）へ向かう。ここへ来て初めて避難所へ来たという印象を受け、自衛隊は勿論、各地から集まったボランティア、そして多くの被災者の姿があった。

そこにたまたま居合わせた大阪市から派遣されている市職員と保健士に、「この避難所に障害のある人はいますか？」と尋ねたところ、「おそらく障害があるだろう人なら1人…」ということで、館内を案内してもらう。その対象者は体育館内のプレイルームのような室内に、家族や自宅近隣住民の方々と一緒に過ごされていた。『避難所』での生活はご本人にとってかなり辛い環境であると容易に想像できたが、知った顔と一緒にいるという安心感のみで何とか過ごしているという印象。その人以外に障害のある人は特に見当たらず、体育館内でなく総合運動公園のグラウンド・駐車場に停車している車内で生活をしている人に関しては、保健士さんも把握しきれていないとの回答であった。

このような避難所は大津町の中でも大小17か所あるので、各避難所でも障害者がいるかどうかを把握していか否か、また直接赴いたとしても教えてもらえない可能性が高いとのことであった。

4. 30日（土） 益城町へ。

益城町は大津町（農村）とはまた違い、住宅が立ち並ぶベッドタウン的な街で、建物の築年数も新旧様々。初めに益城町役場へ行き『ボランティアセンター案内図』という張り紙を見て、そこから徒歩にて記さ

れていた場所まで約2~3Km歩いて移動をする。大通りに添って歩いて行くと、石塀が今にも崩れそうな状態の家屋が軒を連ねている。道はひび割れが多く、足元と石塀に注意を払いながら移動したので、2~3Kmという短い道のりも長く感じる。大通りに面した家屋よりも、小路へ入った住宅の方が甚大な被害を受けているという状況であった。直下型の地震であったせいか、同じ町内でも被害の大小は異なっており、赤札・黄札・青札がそれぞれの住宅に貼られて倒壊の危険度合を区分化されている。一步一步、歩みを進めて行くに連れ、気持ち擦り切れていく。



ようやくボランティアセンターのある、益城町保健福祉センターにたどり着くが、そこには障害者の姿は無く、また『ボランティアセンターの移設』という張り紙があった。大津町の避難所同様、日本各地から派遣された公務員がそこでも避難所の窓口を開設している。保健福祉センターの向かいには町立広安小学校があり、近隣住民は二か所に分かれて避難しているようであった。新たな『ボランティアセンター移設』の張り紙を頼りに、町はずれにある(株)井関製造所へ移動する。(株)井関製造所は農

業機械を生産している会社で、会社の敷地には広大なグラウンドがあり、そこに地元社協が開設しているボランティアセンターがあった。その時、既にお昼を過ぎていたので、午前中にボランティアセンターから益城町内へ派遣されて作業を終えた人々が、センターに戻って来る姿がちらほら見受けられた。

そこでも社協職員に、被災された障害者の行き先を尋ねてみるが、「障害者の個別ニーズが情報として集まってき来ていない為、把握が出来ていない状況」との返答であった。マッチングボードを拝見すると、がれき撤去の依頼がほとんどの割合を占め、施設からの依頼がころうじて3件あったが、その内2件は高齢者施設からの依頼であった。



夕方近くになり熊本市内、西区の『生活介護支援センターあゆみ』へ向かい、そこで荒川さんたちと合流をする。『あゆみ』に到着した時点では、既に日中利用者は帰宅された後で、今晚施設に泊まれる4名の利用者と職員が残っていた。挨拶を済ませて、荒川さんたちと情報の交換をしたのち、昨夜から『あゆみ』に泊まり込んでいたそうそうの杜スタッフは一旦外出。私は『あゆみ』利用者とスタッフと一緒に夕食を摂る。

宿泊利用者4名(男女各2名ずつ)の中で、私が日中訪れた益城町に在住の人がおり、その人は震災発生後益城町の避難所にて避難されていたが、足の装具の足音が他の避難所利用者に不快感を与えるという理由で避難所からあゆみに移って避難生活を余儀なくされているということであった。夜間は男性利用者2名とそうそうの杜スタッフ3名で同じ部屋に泊まり、身体介助(トイレ誘導や体位変換など)をおこなう。



5.1日(日)最終日

「あゆみ」を出発し、午前中のみ熊本学園大学へ。

今現在も避難所生活を続けている障害者10名程度(学園大避難所開設当初は70名程いたようであるが)の手伝いをする。私はTさんという年配の男性と一緒に過ごさせてもらうことができたが、やはり避難所生活が2週間以上経過して、身体的にも精神的にも疲弊されている様子が覗えた。その男性は学園大近くに住んでおられ、ご夫婦で避難をしてこられたが、つい先日奥さんがエコノミークラス症候群で学園大避難所から、近くの赤十字病院へと救急搬送さ

れて行かれたとのこと。終始男性の話に傾聴することしかできなかったが、あえて明るく振る舞って話しておられても、時折『ふっ』と黙り込んで一点を見つめる男性の姿を見ると、胸が締め付けられる想いがした。

【感想】

今回の派遣では、震災後2週間という時間が経過しており、ようやく現地では大規模な自然災害に対して『とりあえず形を整える』という段階を経た時期であったと感じた。被災者の方々は、自分たちの身に降りかかった天災を受け入れることすらままならないまま、1日1日をどのように乗り切っていくのかという課題に目を覆われている。また、例え事態が終息に向かおうとも、いずれ訪れるであろう大きな絶望感や孤独感に対し、『私たちはどのように手を差し伸べられるのか?』ということを考える機会となった。そして今回のことを、我々の日々の生活に、どのように落とし込んで備えていくべきなのか。熊本で見聞きした事や感じたことを、私の周りの人たちにどれだけ伝えられるのか。まずは出来る事から1つずつ、小さな種を蒔いていきたいと思う。



報告—5

梶田花恵

▼4月28日の晩に大阪港よりフェリーに乗り翌朝別府港へ。そこから熊本県を目指す。途中地震の影響により迂回ルートで熊本市へ。予想していたよりも広範囲での地震の影響は少なく感じられたが、やはりところどころ屋根にブルーシート。『災地障害者センターくまもと』が立ち上がったばかりの本部へ寄せてもらう。地震自体を受け入れ、これから人の生活を立て直していく上で何が必要か精査していく段階のようだった。熊本学園大学には地域の避難所でしんどい思いをしている障害者が集まり、そこでは学生ボランティアが昼夜問わずその支援にあたっているとのこと。現場ではもちろんそれぞれが必要に応じて動きをとっていたのだろうが、やはりある程度のしかりとした指示系統がそこにはあったとも思われる。

▼大津町に行かせてもらう。地震の被害の大きかった益城町、大橋が崩落し村が孤立している南阿蘇村からは遠くないのでやはりその地域の家屋、生活自体に被害が生じていた。しかし全壊している家屋もあれば、田舎道なのでそう大きくない道路挟むと亀裂・ズレなどの被害の家屋と、同じ地域だが被害状況に差がある。阪神淡路大震災のときに自身も感じたが、被災地の中ではこういった状況が生じる。これは普段我々が一般的に感じる概念とは一種違う『差別』である。もちろん被害ができるだけ小さく、少ない方がいいに決まっている。しかし、小さければ小さいほど少なければ少ないほどまたそこには『辛さ』がある。(同じ地域でしかも普段から顔馴染みの人はあれだけ

の被害。比べて自分のところは多少の不便さはあってもまだ生活は続けられる)という不可抗力の『肩身の狭さ』を感じるのである。

訪問したとき、ちょうどズレの生じた家屋(納屋)の修繕を行っていたが業者はそこには見当たらずに訊くと「修繕にまわるまで時間がかかり、できる箇所は地域の人でそれぞれ協力し合いやっている」とのこと。高齢化している田舎の中では比較的若年層に入る世代の男性は「普段は田舎のつながりやしがらみがしんどいと感じているがこういう時は力を発揮すると実感」と話していた。

▼避難所となっている総合運動公園・グラウンドに向かう。自衛隊も駐屯してお風呂の提供も行っていた。物資は既に届いてそこにいる分には必要最低限のものは何とか賄っているとみえる。これは逆に言えば、避難所以外で避難生活をしている人は物資をそこに貰いに行かなくては手に入らないということ。

2階建ての施設だが1階に避難者は集中し廊下やフロアにひしめき合っていた。既に大阪市の職員が現地の対応に入っていて順次派遣されているとのこと。「障害者が避難しているか」という質問に対しては「把握していない」とのこと保健師につなげてもらう。「おそらく知的障害があるのではないかと思われる人が1名いるが今のところ直接の関わりはない」とのこと。様子を見に行く。周囲には家族？親戚？知り合い？と思われる人がいてその時は困っている様子は見受けられなかったので声をかけず。ただ、余震の影響で建物に避難している数を上回る避難者はグラウンドや駐車場に車を

停め、車中避難をしていたので、プライバシーがあまり守られない建物内で避難をするにはしんどい障害者がいたならば車中で家族などと避難をしていた可能性は高い。今回の地震では余震が長く続いているので夜間は車で広いスペースに移動しそこで夜を明かす避難者が多く見られた。

▼倒壊の被害が最も大きかった益城町では既に倒壊家屋危険度を示す赤・黄・緑色の紙が貼られていた家屋や建物もあったが、まだ取り壊し作業修復作業など手つかずのところが多い。直下型地震ということで阪神淡路大震災の時と同様、1階部分が全て2階部分に押しつぶされ、酷いところでは屋根が道路にくっついている状態。社会福祉協議会やセンター、小学校が避難所になっていたがすぐに障害者と出会うことはできず手がかりを模索しながら現地で情報収集。避難者の対応にあたっている職員もまだ様々な混乱事態に直面、応対、整理している段階なのでめぼしい情報を得ることは難しい。現在どういった情報があるのか、どういった要望や要請があるのかを知りにボランティアセンターに向かう。マッチングボードには幾つもの要請が書き出されていたが、その中に2、3件の障害者・高齢者の要望も交じっている。避難生活が続くほど日々の生活に不便を強いられる場面は増えていくだろう。これは障害の有無関係なしにどの人にでもあてはまることだが、やはり障害者や高齢者のしんどさはそれを上回る。ほんの数か所しか避難所やボランティアセンターなどに出向けなかったが、障害者や高齢者などの避難状況・生活の実態の把握や避難生活を支える動きやつながりが弱いと感じる。所謂マッ

チング作業まで時間がかかっている。どの地域に何か所の避難所が設けられ、そこに支援が必要な障害者がどれだけいるのかという情報を集め、それらの情報を地図に落としとしていき支援にあたる人を派遣していくという動き。

▼生活介護事業所「あゆみ」ではできるだけその場その場で必要とされていることを手伝ったつもりではいるが、それでもボランティアというよりは逆に寝る場所や食事を提供してもらったという感じになってしまった。避難のため「あゆみ」で寝泊まりをしている利用者さんの中には自宅が益城町で当時倒れてきた家財で額を強打したという人もいた。地震に関して、また今のこの状況をどのように受け止めどのように理解しているのかは一緒に過ごした一晩では図りかねたが、普段からスタッフが常にしっかりと見守っている環境のようだったのできっとその人からの発信があればしっかりと受信されると思われる。

このボランティア報告の内容からは少しずれてしまうかもしれないが…大都市と違い「あゆみ」の周辺はのんびりとした田舎の風景が広がる。それを見ていると心は癒され、和む。人は自然災害によって被害を受け心をも痛めるが、それを癒すのもまた自然なのだなあとその奇妙さを甘受せざるを得ない。

▼熊本学園大学では避難生活を余儀なく続けている障害者（10人ほど）の手伝いをする。障害者だけではなく乳幼児、幼児と避難している親子もいる。私はスポーツ新聞を買い求めに大学から1kmほど離れたコンビニエンスストアまで向かう女性に付き添う。股関節変形症のため歩行が困難、ま

た独居のため避難所生活を選択。道中、息切れがするほど矢継早に地震当日のことから身上話まで話題は広がり尽きなかった。

◎全国から被災地ボランティアは続々と集まり現にボランティア活動は行われ現地の生活者は「助かった」と思う人も少なくはなかったと思われる。しかしそれらは後片付けであったり搬入搬出作業であったり間接的な内容が多い。

確かに直接的な内容になると即その場で応じるということは経験や知識が必要となる場合もあるので、誰でもよいというわけにはいかないことが多いだろう。東日本大震災のときボランティアに行きそこで一緒に活動させてもらった傾聴ボランティアの人たちを思い出す。自然災害に見舞われそれまでの生活が一変に変わってしまった悲しさや虚しさや寂しさ、怒りといった様々な想いにどう向き合ったらいいのか、当事者の辛さやしんどさは私たちにも伝わってきた。しかしそれに対して私たちはどう向き合ったらいいのか何ができるのかと躊躇する場面も多々あったが、そこに傾聴ボランティアの人たちの『聴く』そして『待つ』という姿勢、そして『タイミング』を見逃さないことによって被災した人たちの生活が動き出すということがあった。『引く張る』わけでもなく『押す』わけでもなくただただじっと側に寄り添い話があれば聴き、その人が「よし、前に進もう！」と思いつまで『待つ』。これは私たちが普段行おうとしている、行っているエンパワメントの視点。この視点を普段からしっかりと持っているか振り返り、それを基に強化していくことを改めて感じる。伴って実際に私たち

の生活の場で大規模の自然災害に見舞われたときを想定すると、支援者としての動きは繰り返し行っている訓練を怠らず備えにすること、また非常事態では生活自体に支障が出ることから誰もが障害がある状態になるのだが、それでも障害者にとってはより一層不便、しんどさを強いられる状況に置かれる。福祉的避難所を設置することは必要だと感じる。そして障害者にとっては普段関わっている人だけではなく様々な人から支援を受ける可能性がある。その辺りでは『普段受けている支援、非常事態ではそれに加えて必要な支援』という発信になるものを準備しておくことも必要だと感じる。これに関しては、既に当法人で非常事態に支援者が安否確認を行う利用者さん一人一人の個人シートを準備しているので内容の充実を強化。医療ケアが必要な利用者さんは非常事態にどう対処するのかが懸念。普段から本人・家族・医療機関・支援者と共通認識を持ち器具などの準備や手配など備えておくことが必要だろう。とにかく他人事ではなく、いつか来るかもしれない非常事態を普段から想定しておくことが今できることの第一歩となると今回の被災地に行かせてもらい、更に強く思う。



報告—6

井上 愛子

4/29（金） 被災地障害者センター熊本
の事務所にて東さんから現状を教えていた
だき、NPO 法人広域協会の吉田さんに、生
活介護支援センターあゆみで活動を始める。
利用者家族が立ちあげた施設ということも
あり、とてもアットホームな印象。避難所
生活が難しい人は利用後、そのまま寝泊り
をしていた。益城町出身の女性が地震で額
に物が落下して負傷し不安が強くなかなか
寝付くことができないとの事で主に夜間対
応をする。

その女性は、寝室から出てリビングに行き
誰かが来てくれるのを待っていて、追いか
けると興奮してしまうので、離れた所で特
に声かけもせず様子を見て、しばらくして
寝室に入るよう声をかけると戻ってくる
といった繰り返して眠りが浅い。

4/30（土） 朝食準備を行う。スタッフも
ほとんど休めていない様子。全員が揃うま
で先に来所していた利用者と散歩へ。普段
は時間に余裕もないとのことで少し利用者
も気分転換できたように思う。

活動内容として自宅での入浴が出来ない人
が多いので日中は入浴と動作法を男女交代
で行う。動作法は触れ合うことからお互い
の距離（身体も心も）を縮めていく。そし
て緊張が強い人にはリラックスしてもらう
ことで本人が生き辛く感じていることを緩
和させていく。自閉傾向が強い人にも効果
があるので事業所に戻って実行してみたい
と思う。

5.1（日） 益城町へ被災地の視察に行く。
想像を超えた現実を目の当たりにして言葉
がでない状況。

午後からは熊本学園大学にて活動を行う。
保護者が家の掃除をしている間子どもを見
てほしいとのことで一緒に体を動かして遊
ぶ。地震後1度も入浴が出来ていない乳児
もいた。避難所はきれいだが、生活状況と
しては食事も入浴も充分に出来る環境のあ
ゆみと比べると、同じ県内でこんなにも差
があるのかと思った。

5/2（月）最終日はまたあゆみにて活動。
動作法のビデオ撮影させてもらう。

先生との関係性が長く、付随運動が多い
人もすぐにリラックスされている。
訓練なのに嫌がる様子も見られず、寧ろ気
持ちよさそうにしていたのが印象的だった。

【感想】

熊本地震のボランティアに行くきっかけ
は、東日本大震災の時に皆がボランティア
に行く中、津波をテレビで観た恐怖がなか
なか抜けず行くことが出来なかった後悔が
あり今回も恐怖はあって迷ったが、また同
じ後悔をしたくないという思いで行くこと
にした。そして南海トラフ地震が起きた時
にどのようなことが想定されるのか、もし
被災した時にどのようなものが必要なの
かを、実際に行くことで情報集められるで
はないかという思いもあった。それと地震の
映像を見て興奮している児童がいて、倒れ
ている建物や道路がずれているのを観て
「スゴイね！！」と笑顔で言い、これは私
が実際に被災地に行って感じて伝えなけれ
ばならないと思ったからである。

今までボランティアの経験もなく自分
に何が出来るのか、毎日とにかく必死だっ
たが、行って感じ取ったものは沢山あった。
これを防災に対しての意識を高めるもの
になればと思う。

報告—7

大竹 寛輝

4.29 (金) 熊本に入り先発組と合流。被災地障害者センターの事務所に行き状況等を熊本学園大学の東さんが対応してくださり、東さんから紹介のあった生活介護事業所あゆみでのお手伝いに行くことになる。

到着後、利用者さんは帰りの送迎ということもあり家や避難所に戻られる。あゆみでは避難所で過ごせない方などの泊まりを対応していることもあり5名が残られ、利用者さんの夜間対応、入浴や食介を行う。

4.30(土) あゆみでは入浴を行いその後、動作法という機能訓練を行って食事をして動作法の続きやのんびりと過ごす。

10時～15時の間が活動時間。あゆみは家族会で立ち上がった所で、職員も利用者の保護者が多く目立つ。食事はその場で作ったもの以外に家から作ってきたものを集めたりと、家庭的な雰囲気。

大体、15名～20名くらいの利用で特に入浴には力を入れている。こんな時だからこそ、温かいお風呂に入ってもらいたいと震災直後の断水時から入浴をしていたよう。

動作訓練に関して、見た目はストレッチや拘縮した筋肉をほぐすように見えるが、心理的なりハビリテーションで触れ合うことによって信頼関係を作り、継続していくことで心的な緊張をほぐしていくことが狙いのよう。無理にこちらから体を動かすのではなく、本人の意思で行動することが前提にあるとおっしゃっている。

食事介助も重度の方も多く、人が足りていないように感じた。夜間は4名の方が泊まれる。ボランティア代わる事や震災の影響でなかなか寝付けない利用者もおられた。

5.1(日) 被害の大きい益城、西原村へ視察に行く。普段なら1時間位で着く所、渋滞や交通規制で2時間くらい時間がかかる。西原村までは諦め、益城にて視察をする。警察の方が駐車場で休んでおられ話を聞けるがV0としてはだんだんと減っているよう。出来ることといっても重機での撤去作業が今後、主になるので、そこにV0は入れない。人が来るだけ来てもまとめられていないかあと。ニーズはたくさん埋まっているし人的な支援もまだまだと感じるが、所属する場所や立場で感じ方や優先順位も変わっていくのかと感じた。

その後熊本学園大学にて短時間ではあるがお手伝いをする。そこで市議会議員の村上さんと出会い学校の状況や避難所での話を伺う。

あゆみに帰ってから夜間対応を行う。脳性麻痺の利用者さんの寝ている時の体位変換と排泄介助を行う。

余談だが自分自身、生活介護の経験が少なく、徳岡に教えてもらったり、動きを見たりすることでとても勉強になることが多かった。

5.2(月)

午前中、入浴介助、食事介助を行い午後に新幹線にて熊本を去る。

【感想】

まず、東北での震災派遣のイメージもあり。自分自身の中でギャップに感じたことが2点ある。まずは見た風景。東北では、津波の被害が大きく広域の範囲での被害があった。熊本では範囲は限られていた。局所的に被害が大きく感じた。避難所で皆さん24時間、住んでいるということではなく、家の片付けをしに帰ったり、庭でテントを

張って過ごしている方や車の中で過ごしている人が多く目立った。

2点目は活動内容であった。東北での動きでは主に女川町でのニーズや障害者の調査から始まっていたが、現地についた際にその動きは相談支援協会が行うことで話がまとまっていた。主に実質支援にとどまりニーズが上がれば動くというような印象を受けた。自分自身もどかしさを感じるはその部分ではあるが、全体的な動きの中で

は時として調査なども必要になってくると思うので臨機応変にその場の状況に合わせて動くことが必要だと改めて感じた。

また、あゆみ、学園大学以外では障害者と言われる方々に出会えなかった。益城や西原村、南阿蘇、で避難所、福祉避難所、車中泊、野営している方々のニーズ調査など早急に体制をつくり入っていくことも必要だと感じた。



生活介護支援センターあゆみ



動作法



2.被災地支援活動日誌より

社会福祉法人 そうそうの杜被災地派遣(熊本)活動報告書

平成 28 年 5 月 24 日 (火)

記入者

中西洋平

被災地障害者センターくまもととしての動き	<ul style="list-style-type: none"> ・Aチーム: Aさん宅(女性)部屋の片付けを行う。 ・Bチーム: 自宅の状況確認。本人の聞き取り。 ・Cチーム: 自宅での見守り・介助を本人より状況確認・聞き取り。 ・Dチーム: Iさん(女性)部屋の片付け・雨漏り防止のシート張り。
	新規相談2件: ①男性・部屋の片付けの依頼。②女性・買い物同行依頼。

時間	具体的な活動内容	指示者
9:00~12:00	・今までのケースの見直し・事務所兼宿舍の掃除	岡崎
12:00~13:00	昼食	
13:00~14:00	移動	
14:00~15:00	熊本市sさんショートステイ先に訪問。26日27日の自宅にての見守り支援の聞き取り。	
17:00~18:00	ミーティング。	岡崎

連絡事項	<ul style="list-style-type: none"> ・本日より、大阪より男性ボランティア2名追加。25日に男性ボランティア2名帰阪。 ・宿舎は、男は雑魚寝・簡易マット・毛布。女性は段ボールベッド。お風呂は男女共用で近くはないけど銭湯あり。近辺にスーパーなどあり物などは困らない。
------	--

氏名	ケース
Mさん(女性)	・精神科に通い。60歳独居。家電類をどうにかして欲しいとの要望であったが、震災前から壊れているものが多く、住宅が危険な状態。本人は実感していない感じ。相談支援の事業所と居宅ヘルパーがはいっているようだが機能していない。こちらからのアプローチは必要。
Uさん(女性)	・発達障害・手帳なし。民生委員からの依頼で住宅が住めない状態なので、引っ越し。役所の手続き同行。生保の申請は、土地を持っているが手放したくないので市営などで探す。制度に関しては知らなかったので説明。特に悪い印象ではなかったとの事。
Aさん(女性)	・精神・うつ? 部屋を片付けられなく、物が溢れている。福祉制度に関して、知らなかったので前向きな回答。次回、訪問時にサービスを紹介。
Sさん(男性)	・脳梗塞にて左半身麻痺。自宅での生活が不安とのことで老健にて入所中だが、一時的に出ないと行けないとのことで、家族が見れない時間のみ見守り・一部介助支援に入る。ご本人の気持ちが落ち着き次第自宅に戻るとのこと。同居の妹さんは母親の介助もあるとのことで今後は不安との事。制度に関して説明、一度相談してみるとのこと。

感想	・ケースで、入りは部屋の整理や片付けが多く、そこから関わっていくと、新たなニーズが出てくることは多々あるが、入り込みすぎると温度差は感じるので合わせて行く必要はあると思った。基本、相談窓口は事務の方で東さん中心に指示がありボラが動く体制です。また、東北の時とは違う形である。
----	---

明日の予定	A M	・Kさん(女性)宅にて片付け引越 し作業	P M	・Kさん(女性)宅にて片付け引越 し作業
-------	--------	-------------------------	--------	-------------------------

社会福祉法人 そうそうの杜被災地派遣(熊本)活動報告書

平成 28 年 6 月 3 日(金)

記入者

市川大貴

被災地障害者 センターくまもと としての動き	I永さん(精神)宅大型家具移動
	M川さん(視覚)住所変更手続き
	T川さん相談及び話し相手

時間	具体的な活動内容	指示者
9:00	ミーティング	岡崎さん
9:30	I永さん宅片付け	
18:00	支援会議	東さん、岡
19:30	終了	

連絡事項	『あいえる協会』小林さん、『CIL』三澤さん帰る
	『ノーマライゼーション協会』小西さん、『たびだちの仲間会』長村さん(ベリーダンスのヘルパーさん)センター入り

氏名	ケース
I永さん	精神1級躁状態で初日は怒りモードであったが、片付けを手伝うと分かっているこの日はかなりご機嫌で自分でも「絶好調」とおっしゃる程。本人の希望の、ベッド、仏壇、下駄箱、デスク、大量の布団など大きい家具を運び出す。「ゆっくりボチボチやって下さい」とお茶まで用意してくれるくらい気を遣っている。普段はA型事業所に通っているそうで、家が片付かないと行く気にならないので、あと一つの心配事である、30枚程の畳の処分が済めばだいぶ気持ちも収まるのではないかと思います。

感想	日々相談が増え、ケース対応で忙しくなっている感がある。そのケースを見極め各ボランティアに振っていく役割の岡崎さんの苦勞には頭が上らない。いつかは熊本を離れていく県外のボランティアだが、地元の人間で活動できる人材を見つけなければ、これからの展開は中々進んでいかないかも知れない。
----	--

明日の予定	A I永さん宅畳の片付け M	P 午前のケース終わり次第他チームのへ M ルプ
-------	-------------------	-----------------------------

社会福祉法人 そうそうの杜被災地派遣（熊本）活動報告書

平成 28 年 6 月 7 日（火）

記入者

平井 敏子

被災地障害者センターくまもととしての動き	M岡氏手続き支援（市岡,平井） M川氏同行支援(木村,神保) M村氏手続き支援(小西,渋谷) Kさこ氏入浴介助(大西,田中)
----------------------	--

時間	具体的な活動内容	指示者
10:00	生活保護変更と罹災証明の申請 Y野氏(48歳女性)センターに電話。精神2級 以前より団地住人にいじめられていた。被災後特にいじめが酷くなった。民生委員に話したがあまり聞いてくれない。悩みを聞いて欲しい。午後にセンターに来所される予定。(周囲住人の目があるので自宅に来るのはマズイ)	岡崎
14:30 相談	Y野氏車でセンターまで来られる。両親,姉と住んでいたが姉の暴力行為がある為2年前より単身で団地に。隣りに住む男性や近隣の方が自分の事を精神障害だと知っていて無視する(直接言われたのでは無い)役員や月1の掃除も関わりたくないから出たくない以前は6年間A型事業所あかねクリーンで働いていたが仕事がキツイのと男性の距離感が近いのが嫌で退職一般で探しハローワークなどに行っているがなかなか見つからない病院には2ヶ月に1度行っているがカウンセリングを受ける必要はないと言われた。住宅の相談窓口で精神障害で人と関わるのが苦手なので掃除,役員などする事がしんどいと話しを聞いてもらうよう提案する。(行動できる方)1度相談に行ってみますと言われる。様観	
16:00	M岡氏 必要物資運搬	

連絡事項	代表電話繋がりにくいので繋がらない場合には090-****-****へ
------	-------------------------------------

氏名	ケース
M川氏(視覚障害)	M岡氏 生活保護変更申請手続き同行 15日に障害年金が入るまでの間一万でいいから貸して欲しい。役所では貸す事が出来ないで社協で借りるよう勧められるが一月ほどかかるため断念される。センターからも5000円貸しているが使ってしまった。必要な物を聞くと私は脅迫神経症なので使い捨て手袋,トイレトーパー,紙コップ,割り箸,タオル4枚を希望される。センターで検討してもらおう事を伝える。オムツ購入に関しては医療機関で必要である意見書を書いてもらい申請してもらえれば領収と引き替えに払戻が出来る。罹災証明の手続きもまだだったので申請する。

感想	お金を渡すと違うものまで買ってしまう為必要な物はこちらで揃えて必要なものだけを渡す形をとってゆく。
----	---

明日の予定	A 9:30 M川氏(視覚障害)同行支援 M (木村,平井) 10:00K原氏(身体)温水器の確認 (吉田,上原,長塩) 10:00 F 田氏(精神)手伝い(小西,東) U 田(身体)雨どい掃除(大西,大石,栗田) 14:00でんでん虫の会(上原,吉田) 15:00O 島(身体)入浴介助(渋谷,朝岡)	P 未定 M
-------	--	-----------

社会福祉法人 そうそうの杜被災地派遣（熊本）活動報告書

平成 28 年 6 月 18 日（土）

記入者

栗田聖子

被災地障害者センターくまもととしての動き	10:00 S本(車椅子.同行支援)東.宮田.田中.湯井
	13:00 A木(視覚.片付け支援) / 13:00 O島(入浴介助)栗田
	14:00 F田(精神.手続き支援.南区仮設申し込み説明書)東

時間	具体的な活動内容	指示者
9:00	ミーティング	東.田口
	資料整理	
	ケース会議 ケース会議はこれまでされていなかった。今後の支援についてはより専門性を求められるケース対応が増えていくと思われる。コーディネーターとして？ゆめ風基金東氏(4度目).大阪の自立支援センター稲氏が来られ、ケース記録から支援の洗い出しと支援記録のデータ化、フォーマットの再検討等事務局と連携して活動していく。	
13:00	O島 入浴介助	東
17:30	ミーティング	
仮設住宅に関して:車椅子での生活の方の住宅の下見(事務局東氏)。テクノリサーチパークの仮設が当選し、建設ができていない為つもり団地にて下見を行う→山を登った場所であり崖が近く地盤が心配される。住宅の通路が狭い。外設のスロープのみバリアフリー。トイレ(幅58cm).風呂(幅55cm)、段差あり。入浴時2名体制になるが抱えての介助で入口から入れない状態。仮設住宅に関して県との調整は東氏からも働きかける。仮設住宅居住者を対象に、住み始めてからの課題が挙がってくると思われる為、2週間後を目安に住宅に関するアンケートを実施し検証していく。 木山団地は70戸→200戸になる予定。しらはた団地、いいの町グラウンド入居開始。		

連絡事項	本日ボランティア男性6名、女性2名 / 自立支援センター松山 須賀氏イン(~2週間) ガチャバンとともに生きる会(東京)西村、栗田 終了。
------	--

氏名	ケース
O島(身体.入浴介助.女性)	シャワー室の鍵を借りて訪問。本人はいつものシャワー室が予約で埋まっていると昨日言われたそう受付に確認。予約がキャンセルされたとのことで使用する。入浴手順は前回同様、自分でできる部分はしてもらう。次回は月曜に訪問すると伝えておくと、安心した様で「今日はシャワー2回で良いですよ」と言われていた。センターから次回の時間を確認する様依頼があり、午後からリハビリの為10時に約束する。「来週の予定を伝えておきます」と、リハビリ予定時間をメモ取らせてもらう。入浴終わると「カフェに行きます」と熊本学園大学ボラのおひさまカフェに揚々と向かう。
感想	センターより、ボランティアの人数が減っている為、募集要件の緩和を検討して人数を確保していきたいとのこと。ケース内容について、この1週間に限っても日々変化している。継続して支援が必要な方が多いが、震災によって緊急で相談する方が多い様に見受けられた。関連機関と繋がっている方の中にはいる様だが、現状が不明なままセンターが役割を担っている方もいる為、情報の共有と今後の動きの見通しが必要かもしれないと感じた。

明日の予定	A A木(女性.視覚.糖尿病.片付け.生活聞き取り),K閑(統合失調症.部屋片付け),F 田(精神.家族状況聞き取り)	P M
-------	--	--------

社会福祉法人 そうそうの杜被災地派遣（熊本）活動報告書

平成 28 年 6 月 23 日（木）

記入者

澤崎 拓磨

被災地障害者 センターくまもと としての動き	AM K関迫さん;訪問調査前の調整(林,須賀) F原さん;庭木の剪定,アセスメント(竹内,澤崎) N田さん; 床板の確認(富田,大川,湯井)
	PM O島さん;入浴介助(国本,大塚) K関さん;片付け(竹内,関野,須賀,津隈) M山さん;訪問(湯井,澤崎)

時間	具体的な活動内容	指示者
9:00	ミーティング	
10:00	F岡さん宅訪問 アセスメント,草むしり	
13:30	M岡さん宅訪問 スノコ設置, 聴き取り	

連絡事項	本日in関野 out伊勢,林,大川,富田
------	----------------------

氏 名	ケース
F原さん(精神; 70代男性)	自宅訪問しアセスメントを行う。内容は以下の通り。うつ病により精神2級の手帳を所持。罹災時のショックとストレスでうつが進行、またPTSD(フラッシュバック, ふらつき感)の兆候もあり。福祉サービスの利用状況としては、週2日ヘルパーが訪問、週1日で訪問看護を利用中。また、毎週金曜日に自身で通院し、薬を処方してもらっている。本氏の日中の生活としては、弓削病院のデイケアを利用中。土曜日は同場所で開催される料理教室に参加している。独居で家族は無し。収入は本氏の年金のみという状況。今回の主訴としては、震災からうつが悪化し、首筋の痛みもある為、自分では草むしりも剪定もできない状態である故、代理でして欲しいとのこと。スタッフ2名で全体の半分ほどは草むしり行う。続きは来週木曜に再訪する予定。今回のケースが被災障害者支援として妥当かどうかは疑問の余地が残るが、今後の別サービスへの引き継ぎも検討する予定。
M山さん	昨日に続き自宅を訪問する。完成したスノコを設置すると、「これはまた、いいものが来たね」と言って破顔している。高さの調整を行いながら聴き取りする。自宅近くのアパートに空きがあり、奥様が管理会社に問い合わせたとのこと。物件自体は補修が必要で、具体的な話はこれからになるが、「今の家も近いし、ここに入れたら嬉しいんだけどね」と奥様共々話されていた。夫婦揃って笑顔多く見られている。

感想	今回訪問した熊本市東区東野は、"忘れられた被災地"だという話を聞くことができた。全壊の家屋も多く、被害も相当なものだったが、熊本市と益城町の丁度境目あたりにあることが、影響してか、報道では中々取り上げられず、ボランティアが来るのも大分遅かったようだ。現地では60代の女性が独力で屋根にブルーシートを掛ける姿も見られたという。離れた地にいる時は、メディアの情報を頼りに復興の度合いを判断しがちだったが故に、今回の話は衝撃だった。同時に、実際に現地に来て、自分の目で見て行う支援の重要性を再確認した。
----	--

明日の予定	A Oがたさん;ブルーシート張り?現状確認 M 認	P M
-------	------------------------------	--------

社会福祉法人 そうそうの杜被災地派遣（熊本）活動報告書

平成 28 年 6 月 29 日（水）

記入者

佐藤博

被災地障害者センターくまもととしての動き	松村(須賀、吉本) 罹災証明立会い、内藤(大庭、永津、関野)草取り、ブルーシート張り下見、正田(田村、猪飼)買い物同行、山崎(須賀、吉本)荷物移動 避難所周り(佐藤、坂井、平島)
----------------------	---

時間	具体的な活動内容	指示者
9:00	ミーティング	
10:00	大津町、菊池市、菊陽町避難所視察	
	地区名:大津町 施設名:大津町災害ボランティアセンター、老人福祉センター、本田技研工業体育館 大津町地域包括支援センター 報告事項:社協の方と話を進行。町役場、地域包括支援センターがしっかり連携をとり重度障害者に対しても住居を把握し対応されている。障害者手帳を持たないグレーゾーンの方に関しては、今後の課題であり、対応できない状況であれば当局に連絡をすることもあると言われる。避難所に以前は、最大450名いたが震災後二ヶ月半経った今では、45名ほどに減っている。残っている方の状況は、コミュニティーが出来ていて、皆で居るのが楽しく、一人暮らしが寂しいから残っている方や、地震や大雨での災害が怖く、また、避難するのに時間がかかりすぎるため、残っている方がほとんどである。社協の方から言わせれば「支援に甘えてい。今のままでは次のステップにいけない」とのこと。今後、避難所閉鎖時に何らかの支援は必要と思われる。地区名:菊池市 施設名:菊池市役所福祉課 報告事項:障害福祉係長と話を進行。福祉会館に避難所はあるが、現在2名の方しか利用されていない。市内に現在1200名の方が障害者手帳を持っているが、そのうち500名が福祉サービスを受けているとのこと。残りの700名は福祉サービスを受けていない状態なので今後、支援が必要な場合連絡をいただくことになる。地区名:菊陽町 施設名:社会福祉協議会内災害ボランティアセンター 報告事項:避難所利用者は3名。災害ボランティアセンターの方と話を進行。震災直後は多くのSOSがあったが6月下旬現在では問い合わせはほとんど無い状況とのこと。現在、地域住民の方のボランティアで対応されており、活動は毎週日曜日のみの活動のみとのこと(一日3~4件)。今後、地域のボランティアスタッフの手が足りないときに連絡を頂くことになる。	
17:00	ミーティング 日報作成	
20:00	益城町屋台村視察兼夕食	

氏名	ケース
感想	本日は避難所周りを行うがどこの避難所も滞在者が激減している。現状残っている人たちは一人暮らしの方であったり、避難所生活を快適に思っている方達を中心であった。どの街も復興に向けて少しずつだが前に進んでいるように感じた。役場などで話を伺うと手帳を取得している半分以上の方達はサービスを受けておられない現状であった。震災を機に資源に繋がった方達もいると伺い今後も増えていく事が考えられるのでセンターの役割は重要だと感じた。センターを経由して資源に繋がる活動を今後も続けていく為にも、人材の確保は必須であると思う。夕食はスタッフと6月25日益城町にオープンした屋台村に行ったがとても活気があり大勢の方達で賑わっていた。郷土料理などを安価の値段で提供され完売の店が多数見られた。益城町は倒壊の家がまだまだ多数散見されるが一歩ずつ前に進んでいるように感じた。

明日の予定	A 新規相談(聞き取り) M	P 家の中の方付け M
-------	-------------------	----------------

配布したビラ



被災地障害者
センター
くまもと

しょうがい

かた

障害のある方へ

開設のお知らせ

ひさいちしょうがいしゃ
「被災地障害者センターくまもと」

げんちほんぶ
(JDF 現地本部)

とう
当センターは被災障害者(身体、知的、精神など)の
さまざまこまごと
様々な困り事についてどんなことでも手助けします。

SOS は

096-234-7728

とう
当センターは、熊本にあるさまざまな障害者団体・福祉団体が協力して立ち
あげたものです。

このセンターは、これまでの被災地支援を続けてきたゆめ風基金などの
きょうりよくう
協力を受け、日本障害フォーラム(JDF)の現地本部として活動しています。

くまもとし ひがしく ながのねにし
〒861-8037 熊本市 東区 長嶺西 2丁目 6-11

TEL 096-234-7728(午前9時~午後6時)

FAX 096-234-7729(24時間OK)

E-mail hisaitikumamoto@gmail.com

URL <http://hisaitikumamoto.jimdo.com/>



そうだん れんらく ま
ご相談・ご連絡お待ちしております

3. 各部署より

テーマ「実際に今、地震が発生したら・・・」

居宅介護【とことこっと】

高橋 宏明

私は居宅介護支援の部署に所属しています。実際に地域で生活されているお宅に訪問して支援をしています。ほとんどの利用者は城東区の方ですが、城東区だけ見ても広域になります。そんな中いざ大阪に大地震が発生したら…当り前だが日中系の事業所とは違い、利用者が一点に固まっていることはありません。それぞれの家にいる人がほとんどです。まずは安否確認をしなければいけないのですが、ライフラインが寸断されてしまっていては電話での確認が不可能となり、実際に利用者宅を回るしかないのですが、そのマンパワーの確保も果たして出来るのか。利用者だけでなく我々支援者が被災することだってあり、いざ動こうとしても動けない可能性もあるのではないかと。

いろいろと考え想定していても、実際に想定通りになることなどないと考えます。しかしだからといってそれが無駄になることは決してありません。事前にどのように動くか、情報の整理など日頃から意識し準備していくことはとても重要なことだと思います。さらに利用者のことを地域の人にも知ってもらおうということも重要なことであると考えます。地震だけではなく、いざ何かあった時に知ってもらえていることの意味はとても大きく緊急時の大きな助けとなると期待できる。

いつ起こっても大丈夫、とまではいかなくとも日頃から少しずつでも積み重ねて準備、意識をするようにしていきたい。

生活介護【げんげん】

橋本 秀貴

地震の規模にもよりますが、全員を無事に避難してもらうのは、非常に難しいと感じています。地震そのものによる怪我等の被害は勿論のことですが、行方不明や興奮して動いてしまったの怪我等、二次的なものが起こってしまう可能性が非常に高いと考えています。

防災訓練において、起こりうる状況を想定して行っていますが、まず間違いなく想定外のことは起きてくると考え、その時に機転をきかした動きができるかが大きな課題となるとともに、できるかぎりの準備しておく必要があると考えています。

利用者全員が避難場所を理解しているというわけではありませんが、何回も訓練を行ってきているので、場所を理解している利用者も少なくありません。身についていることは、何かしら役に立つと信じています。それに加え、普段から建物内での活動だけでなく、できるだけ外に出て近隣の方に顔を覚えてもらえればと意識しています。

基本的に災害時には、玄関前で人数確認をしてから、避難場所へ移動しています。人数確認の時に見当たらなかった利用者が、みんなで避難場所に移動したときに、先に一人で移動している利用者の姿を見つけた。また興奮して飛び出してしまい、行方不明になっていた利用者が、近隣の人と一緒に避難所に現れた。などができることを目標としています。

理想に過ぎないかもしれませんが、否定するものでもないと考えています。

就労継続 B 【 座座 】

国本 英浩

毎月の訓練を行っている事で避難場所までの道のりはほとんどの利用者が把握はしている。ただ実際に地震が発生したらとなると、いつものように動けるかといわれると難しいと思う。パニックや動けなくなる方、急に飛び出す方が多数出てくるものだと想定される。スタッフだけで全員を避難させるには難しいと思われるので、本部など近隣へのヘルプを素早く要請しないとイケない。携帯電話など繋がる保障もないので予め人手が必要な事業所をピックアップしてもらい動けるスタッフはすぐに駆けつけてもらえるようなシステムが必要かと思う。日頃から地域の方達との関わりを持つ事や知ってもらえることでお互いに助け合えるような関係を築いていけるように心がける。避難した後もどのようなケアが必要なのか、避難所での生活に対しても想定して考えて行かないとイケない。



就労継続 B 【つむぎ館】

松田 昌規

「実際に今地震発生したら」・・・これは毎回どこかで地震が起きると必ず出てくるキーワードだが、正直なところ、冷静に判断し行動できるのかは難しい、というか想像出来ないのが本音だ。

いくら考えても想像は超えるものだと私は思う。元も子も無い話になってしまうが。つむぎ館は年齢の幅が広く、高齢の方も多い。毎回避難訓練での課題になっているがどうしても1人1人の行動の速さに差が出てしまい、バラバラになってしまう。実際地震が起きた時にはまずは何をするか、そしてどう行動するか、どこに向かうのか。これは避難訓練時にはもちろん毎回確認している。ただそれをどこまで理解出来ているか、それが瞬時に行動にうつすことができるかはスタッフだけでなく利用者にも求められることだ。実際に何人かの利用者突然「今地震が起きたらどうする？」と聞いてみたところ、「逃げる」とか「避難する」という言葉は出るが、具体的にどうするの？と聞かれると考え込んでしまう人もいた。それを見て、その原因は私たちスタッフの教え方が弱いため改めているいろんな方法を使ってでもしっかり伝えることが必要だと気付かされた。

また、避難して終わりというわけではなく場合によっては避難生活を余儀なくされることも十分あり得る。いろんな場面で不自由になること、苦しいことなども伝えなくてはならない。それと同時にその時に私たちがどのような支援を行い、安心してもらうかも考えなくてはならない。

就労移行・継続 B【今福事業所】

小澤 奈津

普段から今福事業所の避難の様子は比較的スムーズに動けていると思います。それは、訓練としての避難の時と実際に緊急地震速報が携帯で鳴った時の避難の様子が変わらないからです。しかし、大きな揺れを体で感じたらいつものように動けない方も出てくるでしょうし、怪我の状態によっても歩けない方は救助が必要になると思います。日中の時間帯に地震が起きたらまず机の下に頭を隠すようにしています。声かけが必要な利用者もいます。地震の揺れが収まったら、廊下にあるヘルメットをかぶります。

また、事業所の前には寝屋川が流れていて津波に警戒する必要があります。避難後も含めて津波への確認や情報収集が必要であり、建物自体は鉄骨で出来ているので建物が特に問題なければ、という設定での避難訓練も併せて屋上に避難します。どうしても壊れた時など実際には、今福小学校への避難が必要だということは、伝えています。

その後津波の心配がなければ今福小学校に移動します。万が一津波が押し寄せてきたらそのまま屋上で待機して、救助を待ちます。など、その都度伝えるようにしています。

また、今福事業所は施設外就労を3か所しており入れ替わりがあるので、毎日人数把握はしておかないといけないと思い、毎夕に終礼後ミーティング時ホワイトボードでの確認もしています。

今回のような大地震の場合、近隣住民の方との助け合いも必要になってくると思います。些細な事ですが日頃から挨拶を交わしたりする事も大切だと思います。

集いの広場【だんだん】

松本 明子

正面出入口を開放し、避難経路の確保、本棚からの落下物による事故防止の為、部屋を中心へ誘導。

状況を見て、落ち着いて屋外へ避難（ヘルメット着用）屋外への避難の際は、歩道の自転車往来も多く、マンション1階の為、上層階からの落下物の危険性など、様々な点に細心の注意を払いながら避難誘導を行う。

複数の子どもを連れている利用者へは、スタッフが補助し、必要であれば、広域避難場所へ移動する。

だんだんでは、毎日の利用者が異なり、1日の中でも利用者数の変動や、1人の保護者で複数の乳幼児を連れているケースなど、常時、利用者の数や、兄弟関係などの把握が必要である。



【地域】

仲澤 秀敏

南海地震が発生した場合、地域で生活していると被害が出ることは避けられない。

法人は東北地震を受けて現地にスタッフを派遣し、現地の状況を踏まえて防災グッズ等の整備や備蓄、訓練の実施、部署のスタッフが集まり防災会議を定期的に開催し、地震発生後の対応を検討している。

地震が起きた場合は建物の倒壊も考えられるので各事業所が設定している避難場所に速やかに避難する必要があるが、訓練の様に迅速に避難できるとは思われないが、常日頃の訓練は疎かにせず、より安全・確実に避難できる方法を日々検討し、積み重ねていかなければならない。

地域では 80 名近くの利用者が 1 人ないし複数人での共同生活を送っている。事業所での訓練は実施し、積み重ねにより定着しているが、自宅での訓練はできていない。今後は自宅で地震が起きた場合の避難等も考えていく必要があるかもしれない。

一定のマニュアルを作成し、出来る限りの救助が出来る様にしなければならない。利用者一人一人に判断を求めるのは現実的に難しいが、防災、避難の意識はこれかも訓練等を繰り返し、身につけてもらう事が必要と思う。夜間に地震が来ることも考え、対策を考えることが今後の課題。その他にも今回の地震でも課題として挙げられているのが障害のある人たちの避難生活の課題である。皆が同じ条件下の中での生活なので障害は関係ないと言われるが、共同生活が困難な障害のものもある。その中で地震後の避難生活の事も視野に入れて何が出来るかを模索していく必要もあると思う。

児童発達・放課後等デイ【伝】

井上 愛子

日頃からの訓練が定着してきており、スタッフの一声で子どもたちも動くことが出来るようになってきている。避難場所も近くの公園や城東警察等とひとつに絞らず複数の場所へ行けるようにも訓練をしている。そして、年上の児童が年下の児童の手を引いて避難してくれることもある。しかし、いつもすぐに外へ避難するという流れで訓練をしているので、揺れている間は机の下に隠れることもできない可能性もあり、勝手に出て行ってしまう危険性もある。避難することが出来たとしても、前の道路の交通量が多いため二次災害も想定できる。

何よりも実際に激しい揺れだったり物が倒れたり、聴覚過敏の児童に関してはパニックになってしまう可能性もあり、訓練通りにはいかないと考えられる。いくら訓練をしていても建物が傾いたり、崩れたりしたことによって階段が塞がり 2 階から出ることが不可能になった場合には、カーテンで窓から降りていくことや、マットを下に投げて降りる等、日頃からアイデアも出し合わなければならない。

スタッフは出来る限り冷静になり行動に優先順位をつけていくことが重要となってくる。

現在一日の定員は 10 名と少ないのだが、曜日によってメンバーが異なる。常に今日はどの児童が利用しているのかは把握しているが、いざという時に遅れてしまうことも考えられる。ある程度は対応するスタッフと児童の組み合わせを決めておくのも必要かもしれない。

そして伝以外の場所で被災する場合もある。

例えば学校や他事業所であればまだ安心できるが、帰宅途中や家で留守番をしている時だったら…と考えると避難訓練をしていない場所で被災することもあり、ましてや一人である時に起こる可能性もあり得ると思うと不安で仕方がない。そこで一人一人がその場でどう行動に移すのか考えていかないといけない。

周りを見る力を養わなければならないというところに繋がってくる。指示が出てもらって行動に移すことは練習を重ねるとパターン化されて覚えることが出来るが、それでは指示を出す人がいない時はどうするのか。いかに指示を出さずに、児童が一人一人どのような行動をとるのかを見守ることができるか試してみるのも必要となってくる。そのためには避難訓練だけではなく普段の生活の中から周りを見る習慣をつけることが重要ではないか。



就労継続 A 【 Kawasemi 】

飯田 伸二

今回のテーマから、まずは自分の身の安全を守ること、周りの人を助けることそして、何よりも「逃げること」を真っ先に考えた。これは、あの大津波が発生した東日本大震災で釜石の奇跡と呼ばれた一連の活動が非常に印象に残っているからだ。家族が心配だから…あの人は大丈夫か？などめぐる思いはさまざまあるがまずは逃げるのが大事だというのを学んだ。じぶんの身は自分で守るということではあるが、もちろん自分だけが助かるということではない。

Kawasemi は、震災発生時は法人の拠点となる。耐震構造化されている建物であるので、避難場所として利用者やスタッフさらに地域の方たちが避難する場所となっている。地震発生の時間帯にもよるが、ここでは逃げるということだけを考えて行動するのではなく、避難してきた方を迅速に受け入れていかななくてはいけない役割がある。また、本部機能として利用者の安否確認や物資の調達など地震発生時には重要な起点になる。**Kawasemi** はこれまで避難訓練として営業時間のこともあるので実施することは出来ていないが、このテーマにある通り実際の地震発生を想定し、訓練に取り組むことも必要ではないかと考える。避難する訓練ではなくても、それぞれが思い描くあらゆる想定を考えて利用者、スタッフ間で共有できることは十分にあると思うので、地震や避難訓練のことをみんなで語り合える場というものを今後はとり入れていきたい。



4. 権利侵害・虐待に関する聞き取り

平成28年6月15日（水）

虐待防止委員会（4・5月分）

●各事業所での聞き取り

⇒聞き取った事に対しての、各部署での検討・意見等

※全体会議での見解、意見等

●突然仕事場にきたスタッフが、仕事をしている利用者さんに対して、「相撲取りがいるのかと思った」と冗談で言っていた事。

⇒からかっているようでよくないとの意見がある。当該スタッフと利用者さんとの関係は浅くないし本人も笑っている。

そのスタッフとの関係性は考慮すべき。ただし、関係性の有無にかかわらず、第三者から見た場合の評価を意識する必要あり。

●女性利用者さんの顔が少し赤くそれを見た男性スタッフが女性利用者さんの体を触る。時々見受けられる行為。「熱がある？」とかで、おでこや首を触る。

⇒スタッフ本人が気をつけることが大切。大人の女性としての対応を。

●宿直に入った際、ホワイトボードでの提示で「Aさんがものをとるので注意してください」と書かれていること。

宿直スタッフに対しての伝言であるが、誰も見られる状態になっている。

⇒情報としては必要なこと。ホワイトボードで掲示せずに、連絡帳に記入しておくようにする。

●仕事面などをみてこの人は就職できると思うが、就職してほしいと思うのは、スタッフ側の考えじゃないかと思う。

⇒人によるが、本人の将来も考える。

今は就職したいと思っていなくても、その人の長い人生を考えるとどうなのか。

●利用者さんが自由に出入りできる場所の、個人情報が入っているロッカーにカギをかけていない。個人情報の取り扱い。

⇒鍵がかかるロッカーに変更する。

●利用者さんのレターボックス（フロアに設置。見ようと思えば誰でも見る事は可能）に個人情報が入っている。

⇒個人情報につながるものは、早急に整理する。

※個人情報の概念（内部での取決め）を確認する。きっちりした線引きができるわけではない。あまりに神経質になるのもどうか。

●利用者さんに対して、タメ口で話をしたり、友達みたいにしゃべっていることがある。

●利用者さんに対して言葉で注意しているが、理解できているのか。

⇒理解できていない場合がほとんどと考えられる。理解できていない場合の注意は虐待につながるのでは。どのように伝えればいいのか、工夫が必要。

※虐待とはいえないが、利用者さんに対しての対応では基本的なこと。

●食事中に排便、排尿に関する言葉。「○○さん、おしっこいくのか？」等、みんなに聞こえるような声の大きさで言っている等。
⇒常識的に避けるべき言葉。スタッフが麻痺している状況。

●特定の利用者（単独で外に出してしまうと非常に危険）が外に出て行かないように、フロアの内鍵を閉めているときがあるが、その特定の利用者以外も行動制限では？
⇒行動制限にあたるのかもしれないが、状況的には止むを得ぬ場合もあり。当該利用者さん（家族）には同意を得ているが、他の利用者にも同意を取るべきか？

※利用者さんのみで鍵がかかっている場所にいるわけではなく、同意書までは必要ないのでは。

リスクマネジメントとして、同意書の整備、日時の記録、支援計画に明記することは必要。

●作業場にきた利用者に対して、やるべき仕事を用意していない。
※就労だけでなくデイなどにも当てはまる。

●利用者さんがイライラして、スタッフを引っ掻いたり蹴ったりと激しい。それが治まらず個人的な感情で本人を怒鳴りつけた。

●利用者さんに印鑑をもらう時、その意味を説明しない。

⇒説明したらそれで良いのか。本人が理解して意味がある。

※印鑑を押す行為の社会的な意味の伝え方は必要。意味を理解してもらえない可能性が高くて、本人に押しってもらう。

●利用者さんのトイレの時間について。作業中に何回もトイレへ行くので、本人と一緒に「1時間に1回」と決めているが、それ以上（4～5回）行くことがある。トイレに行っても用を足していないこともあるので、その時に止めてしまった。

⇒本人の考え、想いを汲み取っているのか。そうでなければ虐待になる。

※なぜ、頻繁にトイレに行くのかが考えられていない。作業がつまらないためなのか。医療的な側面から考えられているのか。対応にスタッフの緩慢さがみられる。→権利侵害なのでは。

●とことん（個別支援計画）未作成、および同意書の押印ができていない。
⇒スタッフの責任放棄と感じる。

●利用者さんの呼称について。さん付けができていない。

⇒年下の男性に対してもさん付け？「○○くん」は不可？

※関係性にもよるが、年下の男性についてはくんづけでいいのでは。



5. 賛助会員の皆様、ご協力いただきましてありがとうございます。

社会福祉法人「そうそうの杜」では、広く関係方面からの事業活動へのご支援をいただくための賛助会員制度を設けています。当法人の理念や事業目的に賛同される方は、賛助会費を納入されることにより、賛助会員となります。賛助会員の皆様には、当法人より機関紙「想創奏」をお送りします。

賛助会費を御振込いただく場合は、下記の郵便振替口座に振込みをお願いいたします。

一口	: 2,000円
振込先(加入名)	: そうそうの杜
口座番号	: 00940-5-185986

賛助会費・一般寄付(平成28年4月1日～平成28年7月15日にご支援いただいた方)

水谷 春美	橋本 暁子	橋本 喜義,
橋本 千鶴子	飯田 靖子	石原ソーイング石原 正美
徳岡 信	諸麦 由美子	境 篤司
林 善信	北原 建一	守田 稔
倉川 晴子	藤原 静江	植田 彌生
永井 澄子	林 登喜子	森 愛子
谷川 順子	横川よし子	ジェイアイシーウエスト
NPO法人 燦然会	(株)大仁 角出篤史	(株)大仁 新矢和広
(株)大仁 西村克彦	(株)大仁 山本渉	(株)大仁 大場幸二
(有)キウチ化建 木内進	西川 生	浅田 善治・加代子
村津 和雄	三宅 克英	金原 裕一郎
今野 聡大	小澤 茂・日出子	竹本 伊津子
春本 静良	吉信 勝之	



(敬称略、順不同)

その他、地域の方々にアルミ缶・牛乳パック等、様々な物品のご寄付を頂いておりますことを、心より感謝申し上げます。

編集後記

今回のテーマは、熊本地震の発生で震災特集にしました。

次回39号は法人内での研修等を特集します。

ご意見等ございましたら、遠慮なく法人本部までお願いいたします。

社会福祉法人そうそうの杜

大阪市城東区鳴野東3丁目18-5

Tel : 06 -6965 -7171 Fax : 06 -6167 -2622

HP : <http://www.sou-sou.com>

E-mail : a_un@sou-sou.com

地域生活支援センターあ・うん 相談支援事業

・城東区鳴野東3-18-5 Tel/06-6965-7171 Fax/06-6167-2622

とことこっと 居宅介護・重度訪問介護・同行援護・移動支援・訪問介護

・城東区中央2-10-15 Tel/06-6167-7530 Fax/06-6955-8826

庵 生活介護

・城東区中央1-6-23 Tel/06-6935-0909

げんげん 生活介護

・城東区蒲生3-11-10-1F Tel/06-6935-1727

伝 児童発達支援・放課後等デイサービス

・城東区蒲生3-11-10-2F Tel/06-6930-6540

創奏 就労継続支援B型

・城東区中央1-7-27 Tel/06-6935-3794

Kawasemi 就労継続支援A型

・城東区中央1-6-29 Tel/06-6935-1111 Fax/06-6935-1911

座座 就労継続支援B型

・城東区鳴野西5-13-6 Tel/06-4258-6013

つむぎ館 就労継続支援B型

・城東区中央2-10-15 Tel/06-6933-7269

今福事業所 就労移行支援・就労継続支援B型

・城東区今福南1-2-24 Tel/06-6933-0737

想縁綾 グループホーム

Tel/06-6965-7171 Fax/06-6167-2622

添 短期入所

・城東区鳴野東3-2-5 Tel/06-6167-5395

大阪市つどいの広場事業 だんだん

・城東区中浜3-22-9 Tel/06-6961-5505

